

福島ソーシャルワーカーによるナラティブ

ー被災者であり支援者である重層的葛藤ー

○ 武庫川女子大学 氏名 中尾 賀要子 (会員番号 6636)

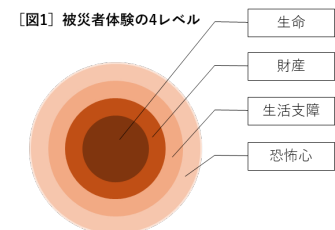
キーワード: 福島、ナラティブ、語り

1. 研究目的

本研究の目的は、東日本大震災による重層的被害に見舞われた福島に生きるソーシャルワーカーら（以下、SWs とする）の経験と実践を、彼らの語りや対話を通して深く掘り下げ、災害ソーシャルワークの「福島モデル」を構築することである。本稿では、2011 年から 2025 年にわたる SWs のナラティブを整理し、第一次分析の結果を抜粋して報告する。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点には、阪神淡路大震災の経験で体系化された復興のフェーズとして「被災体験による 4 レベル」と「被災者心理による 4 フェーズ」を援用する（林ほか 2013）。被災体験は生命の危機、財産喪失、生活支障、恐怖心の 4 レベルに分類され（図 1）、時間経過と共に支援が必要な被災者層は変化するとされる。また、被災者の心理状態によって、復興のフェーズは応急対応期（フェーズ 0 から 2）と復旧・復興期（フェーズ 3）に大別される（図 2）。研究方法は、ナラティブを用いた質的アプローチであり、2011 年 7 月より継続的に聴き取りを行ってきた福島県県北方部社会福祉士会有志及び浜通りの SWs による語りや対話のデータを逐語録化し、テーマ分析を行った（Riessman, 2007）。本稿では、応急対応期の「葛藤」を述べる。

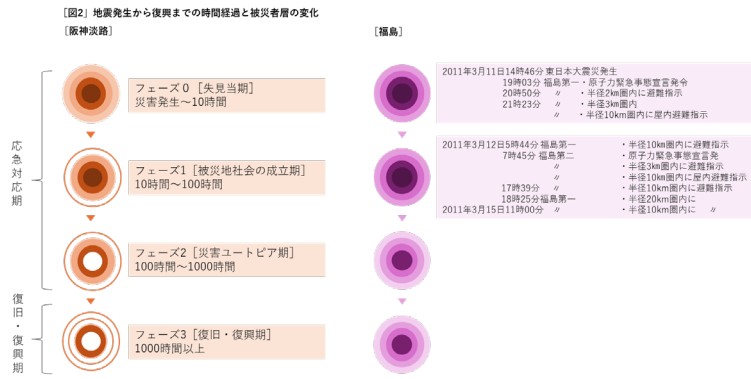


3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。参加型アクションリサーチとして計画した本研究は、2011 年当時の研究倫理に関する一般的な規範意識に従い、従来の研究者主導型の活動として武庫川女子大学教育研究所の倫理審査を受けた。しかしながら、研究の性格上、SWs は保護すべき調査対象ではなく、対等な連携関係が構築されたパートナーとして、従前の倫理的配慮が馴染まない立場と役割を担っている（岡 2022）。なお、本研究のパートナーである SWs は Comoving Fukushima という任意団体を 2018 年に結成し、有志集団として本研究への参加を継続している。

4. 研究結果

阪神淡路の場合、応急対応期は生命の危機と恐怖心が解消に向かい、復旧・復興期は財産喪失が経済的な立て直しに長期間影響した。一方、福島では、応急対応期は原発事故による強制非難の範囲が拡大し、復旧・復興期に至っても生命の危機も恐怖心も軽快することはなく、風評被害へと情勢が深刻化したことは今でも記憶に新しい（図 2）。こうした長引く危機的状況下に SWs がどのような判断を迫られたのか、本報告では「家庭人として」



及び「支援者として」の葛藤を取り上げる。

葛藤とは、どちらを選ぶべきか迷うことである。福島では、健康被害を払拭できる選択肢として、県外避難が容認される向きがあった。ある男性 SW は、次のように回想している。

当時（子どもは）ゼロ歳。やっぱり怖かったですよ。怖かったし、悲しかったですかね。ただ、母子避難をさせることはもちろん選択肢としては考えたんですけど、僕の場合は、結果的には避難させずに一緒にいたんです。避難をして、向こうで、もしくは僕が事故とかで死んじゃうかもしれないですよ。何のためにそもそも避難させたかわからなくなってしまうので、子供が仮に病気になったとしても、今の時間を一緒にいれるような時間を大切にしたいほうが、今を大切にしたいほうがいいよねという結論になった。子供はそうなったときには、ごめんねと言うしかないかなって。何か泣きたくなくなってきました。でも、そういうことがあって、結果的には母子避難をさせずに、仮にまた何かがあったら、とりあえず2人で逃げなということ、というルートで逃げるか決めて、最終的には友達のとこ頼れということ、連絡先を渡しておくみたいな感じで、そういう感じで決めていった。多分、僕の中ではですけど、家庭の区切りをつけたので、自分の仕事に集中するということと、自分が職種としてできることをやる区切りがつけられたと思うんです、僕自身は。（2016年3月）

父親としての苦渋の決断で覚悟を決め、支援者としての活動に注力する「足場を固めた」葛藤のプロセスを、男性は「家庭の区切りをつけた」と表現した。区切りとは、物事を一段落させることを意味する。家庭人であり支援者であることの交差性が示唆された語りである。もう一つのテーマとなる「支援者として」の葛藤は、別の男性 SW の経験に発見される。被災者として、精神的にぎりぎりの状態だった当時を想起した語りを抜粋する。

その中でこれ、これから（住民の）生活支援していかなくちゃいけないから、「こういうふうやっていったほうがいいよ」とか、「お金、ここに行けば100、50万ぐらいもらえる、きょう行けばもらえるよ」とかって言っても、現場の人たちはそんな聞いている余裕ってないですよ。それも、俺も、自分も福島いた時にほかの人から聞いて、言われて。それは言うのは正論だけども、「もうきついいよ、いっぱいいっぱいだよ」というのをわかってるんで、それをわかった上で伝えるってどういうことなの、被災した人たちに伝えるってどういうことなのかなって思いながら。（中略）私が福島いたときって、外部から入った人に、「ビジョンつくってやっていかなくちゃいけない、計画をつくなくちゃいけない」（と言われていた）。それは言ってるのはわかるけども、とてもそんな状態じゃない。「いや、でもできないです」って言えなくて。正論なゆえにぐうの音も出ないんですよ。（2018年10月）

“いっぱいいっぱい”とは、最大限に達しているさまを指す。他県からの支援者による的確な指摘を頭では理解しつつも、支援活動への助言は寧ろ苦言として作用した。被災者であり支援者であることの交差性は、被災した自覚がない限り葛藤を深める可能性がある。他県での災害支援において、その轍を踏まないように注意しているという。

5. 考察

原発事故による先行きの見えない地域課題を前に、福島の SWs は重層的葛藤に直面していた。今後さらに分析を進め、災害ソーシャルワーク福島モデルの構築を急ぎたい。

引用文献

林春男ほか（2013）文部科学省委託研究 都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト

Riessman, CK (2007) Narrative Methods for the Human Sciences. Sage.

岡知史（2022）参加的アクションリサーチと大学研究倫理委員会 当事者とともに研究は学会で発表できるか 日本社会福祉学会第70回秋季大会 方法技術（2）

謝辞

本研究の一部は、日本学術振興会 科学研究費助成事業（基盤研究（C）、課題番号：JP18K02091）および 武庫川女子大学からの助成を受けて実施されました。本研究の継続に多大なるご貢献をいただいた Comoving Fukushima 関係各位にも、この場を借りて心より御礼申し上げます。